

# エビデンスに基づいた支援をしなければ働き続けることができない

～良くならない、変わらないのは我々支援者側の問題～

秋田県 一般社団法人あきた就労サポート One 職業訓練スクール

就労移行支援

平澤 和子

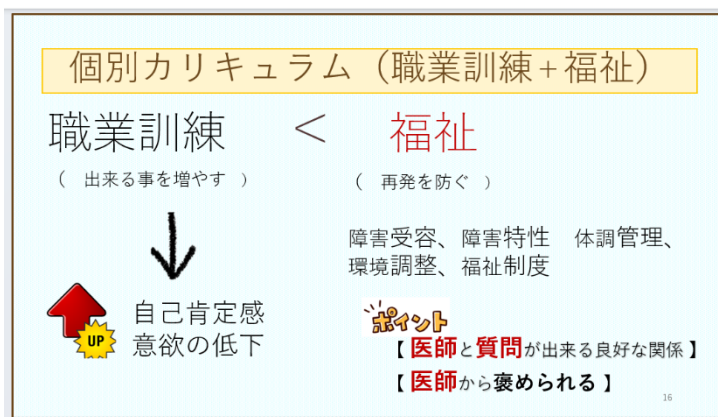
## 1. 事業紹介

私の1歳年上の兄は、身体障害者として生まれた。兄が28歳の時に私が就職先を紹介したことが原因で精神疾患を発症した。病状が安定し、就職すると必ず再発をした。再発するくらいなら働かなくても…と仕事をさせずに20年近くになっていた。働くためではなく、働き続けるためには、社会の仕組みを変える必要があると思い、法人を設立した。しかし、法人を設立する前に兄は亡くなり、一度は目標を見失いかけた時期もあった。



平澤長紀（享年 45 歳）

## 2. 具体的内容



精神障害者が働き続けるためには、医療との連携が必要不可欠である。また、医師と何でも相談できる関係を構築させなければならないため、受診に必ず1度は同行している。毎日健康チェックを行い、生活記録等をアプリに入力、受診の際に医師に持って行く。また、パソコンで近況報告、自分の病状や困っていることを「医師への質問」として考えさせ、回答をもらってくることも訓練として行っている。

家族との関係性を再構築させるために、任意であるが家族も参加する週1回「運動クラブ」を開催している。また、社会の仕組みを変えるために経営者が集まる団体等複数入会し、「障害者やひきこもりの差別や偏見をなくす歴史をつくる」と講話をさせていただき、障害者の雇用先を自ら開拓している。

### 3. アピールポイント

発達は小さい頃からの積み重ねであり、言動や行動には全て意味があるため、小さな変化に対応した支援を行っている。医師とメールでやり取りを行い、医師より「エビデンス(科学的根拠)に基づいた支援をしている」と言われている。「うまくいかないのは我々支援者側の問題」を合言葉に、諦めない支援をしている。

医師とのメール（名前を出さなければと承諾済み）

私が身を置く「医療」と、平澤さんが身を置く「福祉」には隔たりがあります。病気をよくするための介入と、社会でうまくやっていくための介入とでは、相容れないものがあります。

では、この相容れないものをどうするのか。どちらか片方だけにするのか。…答えは、どちらも成り立たせる絶妙なバランスを目指す、です。

でも、この介入はとても難しい。専門的なものです。ですので、私が担当します。平澤さんの役割は私と違い、「患者さんの体調を安定させる」よりもむしろ「患者さんを社会に送り出す」ことです。この二つは相容れないのです。「社会に送り出す」場では体調は不安定になります。この事実をしっかり認識できている福祉の方がそもそも少ないので、私の見解を参考にしてもらえることはとても助かります。ということで、平澤さんは平澤さんのフィールドで輝いてください。具合が悪くなった人は私が改善させます。

### 4. 成果

挫折や傷ついた体験をきっかけに認知や感情のバランスが悪くなり、考え方に偏りが極端になる。過去を治療するのは医師であり、私たち福祉職は未来のお手伝いをする役割である。薬をもらうだけの受診では何も意味がない。何事も医師からアドバイスを受けることで、自己受容や障害受容ができる。医師から褒められることで自己肯定感の高まり、医師と何でも相談できる関係も構築され、働き続けることができている。企業には、短時間労働・週2日からの就労をお願いしている。少しずつ時間を延ばすことで働き続けることができている。

『職業訓練』  
+  
『福祉』

●誰一人働けない人はいない  
真面目（一生懸命）  
優しい

お惠民的に雇用してもらうのではなく、  
会社の力とされるような人材を育てたい

### 5. その他(課題や展望など)

医療は薬を処方するだけの医師がほとんどである。精神療法や認知行動療法、マインドフルネス等々の治療が必要である。しかし、そういった治療をしてくれる医師が少ないのが問題である。就労移行支援は最長3年であるが、働くためではなく、働き続けるためには5年訓練が必要である。医師からも当事業所のようにエビデンスに基づいた支援が5年必要であると言われているため、制度の問題が課題である。